灯

宗教教育お参り～

草野　義輔

梅雨が明け猛暑が続く季節、ほとんどの学校は夏休み中である。夏休みは本来生徒が夏休みで教員は別なのであるが、昔は教員もかなりの夏休みが取れていた。しかし、近年教員は夏休みどころではなく、むしろ通常の時期よりも忙しいくらいの状況になっていて、一口に夏休みと言っても随分と様変わりしてきた。

わが校では夏休みに入ると同時に地区PTAなる行事を七会場に分けて開催している。ほぼ全員の教員が各地に出向いていくので保護者の出席率も八割以上とかなり高い。

そこでは平素なかなかできない保護者とのさまざまな情報交換が行われるのであるが、中には学校にとって厳しい意見もあり、大いに反省させられることもある。

今年ある地区で生徒のおじいさんが親代わりに出席されていた。意見交換の場で手が上がったのでどんな意見かとやや緊張して耳を傾けた。

おじいさんの言うには「孫が中学三年生のときこの学校に行きたいと言うが、私は地元の学校で良いのでは、と反対した。しかし本人がどうしても、と言うので最後には同意した。最近学校に行く際わが家のお仏壇に手を合わせてから登校し、帰宅すると同じようにお参りしている。最近の子供はそんなことはしない、と思っていたが宗教教育をしている学校に行くことでこのような習慣が身についたようだ。今では行かせて本当に良かったと思っている」という内容であった。

宗教教育は公立ではできず私学ならではのことだが、暑さを忘れさせてくれるさわやかな話であった。

私学だからこそできる創立以来の伝統を大切にしていかねば、と再認識させられた次第である。

（日田市昭和学園高校理事長）